

【vol.33】インターバルの位置関係を、目でも覚える

こんにちは、大沼です。

さてさて、ここ最近続いていたインターバルの基本も、今回と次回でひとまず終わります。

慣れないうちは、考えるのに時間がかかったり、ローマ数字が読みづらかったりで、結構大変でしょう。

僕もこの辺りを勉強し始めた頃は、何をするにも時間がかかっていた記憶があります。

楽曲の分析をする時は、その曲のキーのダイアトニックコードを全部紙に書き出して、一つ一つ確認しながら練習してましたからね。

やはり不慣れなものを扱う時は、それなりの労力が必要になってきます。

ただ、キーとコード、インターバルのそれぞれの関係性がわかっていないと、これまで覚えてきたスケールやらなんやらを、ちゃんと活用することが出来ません。

ギター上達に対する向上心が高く、勉強熱心な人の中には、実は

『スケールやコードはそれなりに覚えているけど、使い方がわからない』

みたいな人が結構いたりします。

(※特に独学でやっている人に多い気がしますね)

その使い方がわからない原因は、今、この講座で学んでいるような知識と覚えているスケールやコードが結びついていないからです。

大きく捉えるならば、

『楽曲を構成している要素との関係性がわからないから』

とも言えますね。

そのせいで、せっかく覚えたものも生かせない、と。

この辺りの「使い方」の部分は、
今までの知識を総括した実戦的な内容になります。

なので基本的な理論の部分がある程度やってしまわないと、
話を進められないんですね。

ここがもう少しでひと段落するので、
その後、実戦に入っていきます。

と、言う事で、今回やることは、

『これまで勉強していたインターバルを、指板上でどの様に見たらよいのか？』

についてです。

前回までの内容とはちょっと違い、考える、と言うよりは
単純に覚える作業ですね。

『トニック(やルート)を設定したら、その音から見て、
指板上のどこにどのインターバルがあるのか？』

これをさらっと覚えてしまいましょう。

と、言う事で、まずは、トニックやルート音として、スケール、コードの両プレイ時に基点とする、
5、6弦上のインターバルから見ていきます。

この位置感覚を身につける事により、key、ダイアトニックコード、ダイアトニックスケールを、
スムーズに把握できるようになりますので。

いつものように、基準音をC音に設定して、key=Cで考えていきましょう。

把握するインターバルは、メジャーキーならばメジャースケールのインターバルになるので、

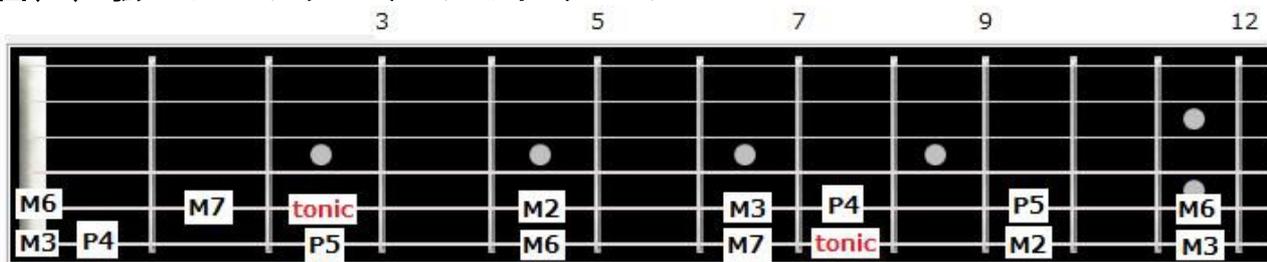
tonic(1st)、M2nd、M3rd、P4th、P5th、M6th、M7th の位置になりますね。

まず、基準となるC音(今回の tonic)の位置として、一番最初に思いつくであろう場所は、5弦3フレットと6弦8フレットの位置ですね。

この2箇所のどちらからみても、メジャースケールのインターバルのそれぞれの位置をパッと判別できるようになりましょう。

と、言う事で指板図はこちらです。

図、5、6弦上のCメジャースケールのインターバル



ある音をトニック(ルート)とした時、全体の基本的な位置関係はこのようになりますね。

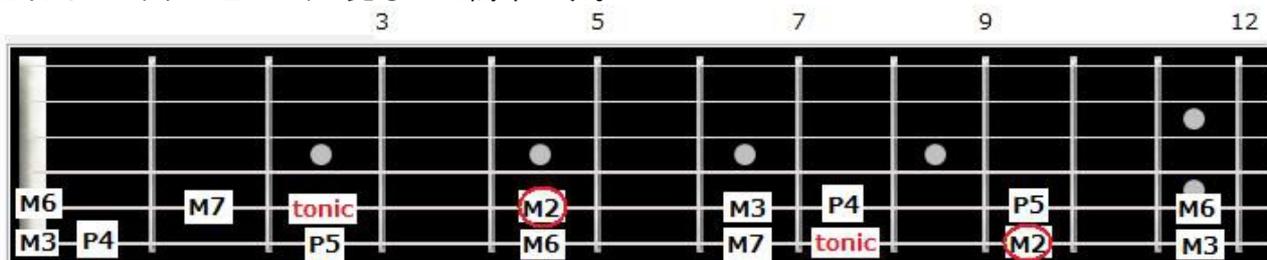
これを覚えて、弾きたい音をパッと弾けるようにする、と言うことです。

現時点でも、ギターを弾き始めて一番最初の、基本的なコードを覚えていく時の名残で、ある程度はすぐにわかるのではないかと思います。

とは言え、いきなり図を出されて「さあ覚えましょう」と言われても、中々大変なところもあると思うので、いくつか覚え方のポイントを挙げていきますね。

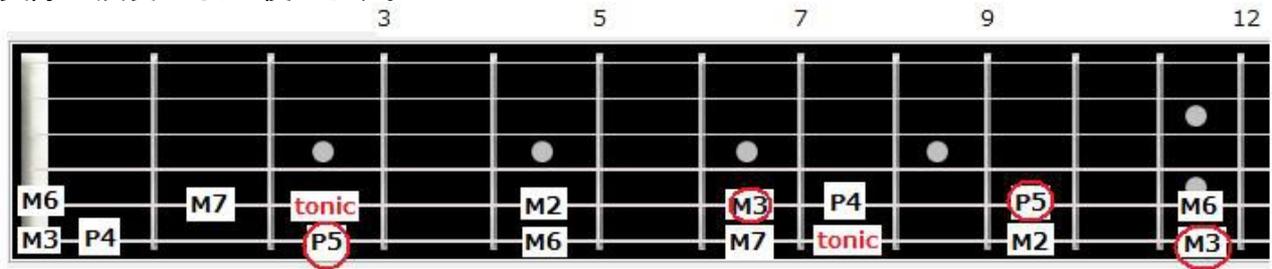
まずは単純に、一番わかりやすいのは M2nd の位置でしょう。

これはトニックの2フレット先なので簡単です。



次にトライアドのトレーニングで覚えた、M3rd と P5th の位置。

この位置関係は超重要なので、早めにマスターしておきましょう。
実際の演奏でもよく使います。



これらを踏まえた上で、残りのインターバルは、M7th はトニックの 1 フレット左(半音下)ですし、P4th は M3rd の隣(半音上)もしくはトニックの真下、M6th は P5th と M7th のちょうど中間にあります。

後、P5th はトニックの真上(低音弦側)とも見る事が出来ますね。

こんな感じで、ハッキリ言ってしまうえば覚え方は自由です。

これらの位置を基準に見て、

**覚えたインターバルのそれぞれの音をルートにした場合、
メジャーキーのダイアトニックコードとしては、どんなコードが構成されるのか？**

これと結びつけば OK です。

(※例えば C キーで、M2nd の D 音をルートにした場合のダイアトニックコードは Dm7(II m7)というように、位置とコードの種類がわかること)

先ほども書きましたが、このインターバルの位置の覚え方は自由です。

普段のスケールトレーニングの最中でも 1 音ずつ確認しながら練習していけば段々とわかってきますし、実際の曲を弾きながら覚えてもいいですね。

以前やった、Let it be などはこちらのよいサンプルでしょう。

このようなインターバルの位置関係は、最終的には全弦で覚えるのですが、まずは基準として見やすい5、6弦から覚えていきましょう。

全弦で覚えるのは大変そうに感じるかも知れませんが、ギター構造上、1オクターブ上のポジションが視覚的にわかりやすいので、そこまで苦勞はしません。

その理屈でいくと、今の段階でも、5、6弦を覚えれば、オクターブ上の3、4弦のインターバルの位置が、ある程度はわかるはずですよ。

こんな感じで、ギターの構造を理解して複合的に考えていくと、効率よくマスターできますね。

後はやはり継続です。

1日1回でも良いので、インターバル把握のトレーニングを行ってれば、単に音の並びに1~7までの番号(とアルファベット)が振ってあるだけなので、意外とすぐに覚えられたりしますから。

それでは、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼